

令和6年度 第74回高知県芸術祭

第53回  
高知県文芸賞  
入選作品集

高知県芸術祭執行委員会



令和6年度 第74回高知県芸術祭

第53回  
高知県文芸賞  
入選作品集

高知県芸術祭執行委員会



もくじ

〈短編小説〉

高知県文芸賞	夜の楽園	堀井麻貴	1
高知県文芸奨励賞	すてられないもの	安藝友知史	6
佳作	踊り子	久尾さとな	11
佳作	トゥルルルル	黒河光貴	16
	おばあちゃんの歎	森田妙	22

〈詩〉

高知県文芸賞	不夜城の病舎	都築悦子	27
高知県文芸奨励賞	嘘	露口奈津子	29
	花を摘む日	山田草花	31
	ちよつとつらい話	結城理恵	34
	同窓会	町城猫	36
佳作	学びという構造物	倉橋孝彰	39
佳作	四季の風	古田彩香	42
	御厨人の窟	甫木恵美	44
	余韻置き場の恋	小島文章	46
	卒業証書の	栗山文子	48
	この世界の	手島快	51

〈短歌〉

高知県文芸賞	土居修	53
高知県文芸奨励賞	渡辺俊平・坂東千里・谷口梨夏	53
佳	山下朔弥・鍋谷ひかり	55
作	川上理恵・坂山智悠・竹村咲子	55
	尾崎淳・内山輝之・吉野ひな	55

〈俳句〉

高知県文芸賞	西崎さやか	57
高知県文芸奨励賞	胡南・徳弘賀年子・徳永逸夫	57
佳	中井絃希	58
作	山内一美・澤村正彦・山本千秋	58
	山本敏子・山崎鈴子・中森鶴子	58
	下元陽斗・武森結菜・橋本美裕	58

〈川柳〉

高知県文芸賞	富士田三郎	63
高知県文芸奨励賞	藤村るみ・だいなつこ・徳永逸夫	63
佳	黒岩せん子・中平瀬奈	65
作	岡林裕子・明神永子・橋田綾子	65
	織田裕一・大野充彦・辻内次根	65
	ますだじゅんこ・宇賀祐子・小笠原登	65
	武森勇翔	65

〈審査評〉

〈作品募集要項〉

審査評	69
作品募集要項	74

# 短 編 小 說





## 夜の楽園

高知市 堀井麻貴

南国特有の、湿気を多く含んだ熱い空気が、じつとりと肌にまとわりつく。私は、はりまや橋交差点のバス停で、荷を詰め込んだキャリアバッグを手に立ち尽くしていた。

目の前を走り過ぎる路面電車を眺めていると、装着していたイヤホンから、サザンオールスターズの『東京VICTORY』が流れてきた。東京モノレールの中で聞いていた曲が、また再生されたいらしい。高知も東京も、今日が猛暑だということだけは変わらない、そう思いながらイヤホンを外した。

お盆前の日曜の夕方は、高知市中心部のこの場所も人はまばらで、行き交う自動車のほかは、幾人かの観光客が写真を撮っているだけだ。私は彼

らとは逆で、勤め先の夏季休暇を利用して上京し、高知に帰ってきたばかりだった。

乗り継ぐつもりで自宅方面へのバスは、もうしばらくやってこない。橙色の夕空を見上げ、このまま待つか、タクシーに乗るか迷っていると、突然、マイクロバスが滑るように入ってきて、私の前でドアを開いた。

「植物園行き？　なんでまた」

車体のガラス窓には、夜間開園のシャトルバスと書いた紙が貼られていた。そして、その植物園は、私の自宅の裏山の頂にあつた。ドアからわずかに空調の冷気が漏れている。このバスで付近まで行き、そこから先は歩いて帰ればいい。突飛な思い付きで、マイクロバスに飛び乗った。

バスは道中まったく停車することなく、山頂に到着した。窓から外を窺うと、植物園の入口に立つスタッフが、人のよい笑顔で来園者を迎えている。私は自分の軽はずみに苦笑しながらバスを降り、人々の列の最後に並んだ。

園に入ると、コインロッカーにキャリアバッグ

を押し込んだ。荷物が消えると気が楽になり、入口でもらったリーフレットに目を通しはじめた。「夜咲く花を、見て回るのか」

この夜間開園は、八月の二日間のみ行われ、園内のあちらこちらで開花する植物を観察しながら、散策しようというものらしい。昼には花見で来たことがあるが、夜は知らなかったなと思う。ここは四国でただひとつの植物園で、広い園地にはさまざまな植物だけでなく、教育や研究のための施設もあるようだ。

——暗くなるまで、展示館にしようか。

私はリーフレットを見ながら考えた。少し離れた場所に、植物図などを展示した建物があった。空を見上げると、東は灰青はいあおがかってきいていたが、ここはまだ明るく、うだるような暑さも残っていた。先に館内を見学して、気温が下がったら野外を回ればいい、そう決めると、展示館を目指して歩き出した。

展示館は木造の独創的なかたちの建物だった。私は入口の自動扉を通り、ほう、と息をついた。

植物について解説したパネルを読みながら館内を歩いていると、スマートフォンに着信があった。休憩スペースに移って見てみると、東京で会った友人、神森恵美からのメールだった。

VV濱さん、無事に家に着いた？ 今日はあるがとう。

恵美は、私、濱田真里子のことを濱さんと呼ぶ。それは、出会った頃から変わらなかった。私はその場でメールを返した。

VVこちらこそ、どうもありがとう。ちゃんと帰り着いたよ。

すると、恵美からもすぐに返信があった。

VV久しぶりに話ができて嬉しかったよ。また、東京に戻っておいでよ。

私は、スマートフォンを操作する指を、ふと止めた。

私と恵美は、二十年前、東京のとある出版社に同時期に入社した時からの、親しい仲だった。私は編集部、恵美は広告部に配属されたが、よく仕事が終わったあとと食事に行き、さまざまなことに

ついて会話した。けれど、私は三十代のはじめに体調を崩して高知の実家へ戻り、今は事務職に就いていた。恵美も、同じ頃に退職して結婚し、子を持ち主婦となっていた。

五年ぶりの再会にはしゃいだ私たちは、銀座の洋食店で、互いの暮らしについて語り合った。その中で私は、「高知にはあまり出版社がなくて、今は編集をしていない。転職先は異業種で、慣れなくて難しい」とこぼした。すると恵美は、「私は仕事をまた始めたいよ」と、慰めとも嘆きとも取れる言葉を返したのだった。

——戻るとは、ふたたび遊びにおいでということか、それとも東京に帰ればいいということか。

どちらか分からず、私はため息をついた。恵美は、好意を伝えてくれているのだと思う。選択肢を示されたように感じるのは、こちらに迷いがあるからだ。

——『東京VICtory』、か。

ふと、思い返す。陽にきらめく高層ビルのあいだを、滑るように走るモノレール。その中で、た

またま聞いたこの曲は、私の気分さえも高ぶらせた。けれどその高揚感、この街に着いたときには鳴りを潜めていた。

旅客機で一時間半ばかり、メールにすれば一瞬間の距離にもかかわらず、存在する落差のようなもの。私は恵美に対して、引け目を感じているのだろうか。どう返事したものか迷ったまま、アプリケーションを閉じた。

遠くから、オカリナの素朴な音色が聞こえてくる。

私は耳をそばだてて、ゆっくりと顔を上げた。この優しい旋律には聞き覚えがあった。心地よい音楽につられるように、階段広場へと出た。

「『愛の花』を吹いていたのか」

広場のステージでは、四人のミュージシャンが、珍しいかたちをした、世界各地の楽器を演奏していた。

私は傾斜のある階段状の客席の一番上に立ち、その様子をぼんやりと眺めた。あいみよんの『愛の花』は、この植物園に縁があったな、と思いつ

す。階段には親子や若い女性のグルーブが腰掛け、それぞれ曲に聞き入っていた。

やがて演奏が終わり、観客から拍手が沸き起こった。ミュージシャンは次の曲をはじめ、私は何気なく天井を見上げた。

——まるで、落ち葉の葉脈が広がっているような。

それは、不思議な光景だった。鋼管のキール梁が、私の頭上から、ミュージシャンのいるステージの先まで、中央脈のように伸びていた。そして、その左右に、木材の垂木が何本も、側脈のように広がっていた。私は思わず振り返り、展示館全体を見渡そうとした。鋼管の中央脈は、馬蹄のかたちをした建物の屋根の中心を、くると円を描くように貫いて、木材の側脈も、それに沿って整然と並んでいるようだった。

——虫食いの枯れ葉が、私たちの頭上に落ちていく、といった風情かな。

私は、自分の空想がおかしくて、ひとり笑った。そのあいだにも、ゆったりとした音の流れは階段

広場を満たし、すっかり暗くなった中庭の木々のあいだから、山へと溶け込んでいった。

すべての曲の演奏が終わり、私はどこかふわふわとした心持ちで階段広場を出た。暗闇の中、南園へと続く林の小道を歩いてゆく。足元には、ぼつりぼつりと電灯がともり、その中にたまに大きな光の塊があつて、それが夜に咲く花の展示スポットだった。

ユウスゲ、オシロイバナと見て歩き、私はふと、ツキミソウとマツヨイグサの仲間という展示の前で足を止めた。鉢に植えられたこれらの植物は、まだ熱気の残る中、白や黄の可憐な花を咲かせていた。

——月見草は、富士に似合うのだった。

私は、昔読んだ小説の文句を思い出した。富士なら、帰りの旅客機からもよく見えた。このけなげな花が、あの偉容を誇る山と対峙したのかと思うと、気の毒だった。けれど、どこか愉快的な気持ちにもなった。

小道に出て、空を見上げる。林の木々の隙間か

ら、幾つかの星が輝くのが見えた。けれど、地上にも、夜に咲く花や草木、土だろうか、むせかえるような香りが、熱気とともに立ちこめていた。

——どちらが楽園かなんて、分からないな。

私は息をつき、笑った。

落ちた地で芽を出し、花を咲かせ、種を残し、枯れてゆく。そんな当たり前のことを、長いあいだためらっていた。そのような私でも、この地で、また花開くことができるだろうか。私なりの美しさを、この楽園で、ふたたび見出すことができるだろうか。

背後が賑やかになり、振り返る。来園者のグループが、歓声を上げながら横を通り過ぎた。その明るさに恵美を思い出して、スマートフォンを手にした。

VVまた、会いに行くよ。

返信を打つ。そして、その言葉に続けた。

VVこちらにも、おいでね。とてもいいところだから。

メールの送信を終えて、スマートフォンを消灯

する。小道は、暗闇に戻った。先を見ると、新たな花の展示スポットの、大きな光の塊がある。そこへと向かって、私はふたたび歩き出した。

## すてられないもの

南国市 安藝友 知史

例年より遅い初雪が降った日、叔父が亡くなった。長いあいだ入退院を繰り返して人工透析を受けていた叔父だったが、最後は病院のベッドで息を引き取った。

叔父に家族はいない。だから、頼れるのは姉にあたる僕の母親だけだった。生前から姉弟仲はあまり良くなかったらしく、僕が実家に帰るたび母は叔父への文句を並べていたが、姉弟の絆から叔父に対する哀れみからか、結局、最期まで面倒を見ていた。葬儀は身内だけの寂しいもので、母の顔に浮かんでいたのは、悲しみというより安堵の表情に見えた。

四十九日の法要が終わり、ようやく肩の荷が下りるはずの母だったが、まだ大きな仕事が残って

いるらしい。

「圭司、今度のお休みに叔父さんの家へ一緒に行ってくれない？」

母から連絡があつて、僕は日曜日に実家へ帰った。家に入る間もなく二人で車に乗り込み、叔父が住んでいた家へと向かう。叔父の家は車で十分ほど走った高台の住宅地に建っている。車内で母はひと言も喋らず、ただ眉根を寄せて何度か溜息を吐いた。

住宅地の角にある二階建ての一軒家。叔父の家を訪れたのは何年ぶりだろう。あれはまだ、僕が高校生の頃だった。建ったばかりの家は玄関ポストまでがキラキラと輝いていた。遠くに海が見渡せる広い庭でビーグル犬が走り回り、部屋の家具は同じ木色で揃えられ、キッチンには奥さんと二人分の食器が並んでいた。

だが、いつの間にか家から叔父の奥さんも犬も消えてしまった。「熟年離婚よ」と母は面白がるように言っていた。それ以来、この広い家に叔父は一人で暮らしていた。

僕の記憶にある姿とは変わり果てた家。玄関前は雑草で覆われ、ポストは錆びて輝きを失っていた。叔父が使っていたのであろう鍵を差し込み、母が玄関ドアを開ける。一歩足を踏み入れると、室内はまるでゴミ屋敷のようにたくさんのもで溢れていた。それらがゴミなのかそうじゃないのか、僕には分からない。段ボール箱や雑誌などが散乱している。

母は慣れた様子で、持参した二足のスリッパを靴から出した。叔父が亡くなってから、何度かここを訪れていたようだ。奥のリビングも様子は同じで、物が部屋を占領していた。

ミニマリストの僕にとって、その光景は理解し難いものだった。なぜ、こんなにも多くの物が家の中にあるのか。

物ではできるだけ置かない。不要だと思う物は何でも捨てる。それが僕の考え方だ。だから僕の部屋には、家具も洋服も電化製品も、必要最低限しか置いていない。物は少ない方が生活は豊かになる。掃除も楽だし、着る服を選んだり探し物をし

たり、時間を浪費することもない。

実家を出て新しいマンションで恋人と同棲生活を始めた時、彼女にも余計な物は置かないでほしいと頼んだ。シンプルな部屋を好んだ彼女もそれに同意し、化粧道具など必要最小限の物以外置かなかった。僕たちは上手くいっている、はずだった。でも、その同棲生活は二年で終わりを迎え、恋人は家を出て行った。それからの僕は、彼女の気配と暮らすことになった。一緒に選んだテーブル、並んで座ったソファ、窓際に置かれた苔のテラリウム、クリスマスにもらったカシミヤのマフラー。部屋中の「物」に彼女との思い出が住み着いていて、それらはことあるごとに僕を苦しめた。だから僕は、部屋の物を全部捨てて新しい物と入れ替えた。そうすればまた、部屋は真っ白なキャンバスに戻ると思ったから。

断捨離とは、執着を捨て去ることだ。今の母も断捨離を望んでいた。「物」に執着していたのは叔父の方だったが、不帰の客となった家の主に代わって、残された執着を母が捨ててしまわなけれ

ばならなかった。

「圭司、この家に住まない？」

冗談めいた口調で母は尋ねたが、もしかしたら叔父の家まで処分することに躊躇いがあったのかもしれない。でも僕が首を縦に振らないのは、端から母も分かっていた。例えば目に見える物を全部処分したとしても、長い年月をかけて家に染み込んだ歴史は、決してなくなるならない。叔父の歴史に囲まれて暮らすなんて、僕には無理な話だ。

叔父の家の中は、新築だった頃からずいぶん様子が変わっていた。西日が当たる場所の壁紙は黄色く染まり、床板のあちこちにキズが刻まれている。家も叔父とともに歳を重ねていた。

食器棚に並ぶ一人では使いきれないほどの食器、引き出しの中にはスーパリーのビニール袋が何十枚も詰め込まれている。何年も前の新聞紙の束や壊れて動かない時計、そこら中にそんな過去の遺物が溢れていた。

不思議と別れた奥さんに関するものは残っていなかった。奥さんが持って行ってしまったのか、

それとも、その記憶だけは消してしまいたかったのか。

犬に関する物は残っていた。庭の朽ち果てた犬小屋、擦り切れた革の首輪とリード。テレビの上には河原でこちらを向いて立つビーグル犬の写真が飾られている。写真はまだ、僕にも理解ができる。けれど犬小屋や首輪をなぜ処分しないのか。使わない食器も古い新聞紙も、どうして捨ててしまわないのか。いくら考えても分からない。

「ちよつと圭司、これ見て」

声がして振り向くと、母が大きな段ボール箱の中から何やら取り出してしている。段ボールの中には、小さな箱やペンや置物などが雑多に詰め込まれていた。母がそのうちひとつの箱を開けて、中を確かめている。入っていたのは年賀状だった。年別に束ねたたくさんさんの年賀状が、箱の中に納まっていた。

「ほとんどが広島の人からだわ」

叔父は広島で工場の作業員として、定年まで勤め上げた。その後、生まれ故郷に戻ってこの家を



建てたのだった。

年賀状のやり取りは、今年まで続いていた。年賀状以外にも、手紙や送り主の写真、もみじ饅頭の空箱まで入っていた。そういえば、叔父の奥さんは広島の人だった。叔父と別れた後、むこうに帰ったのだろうか。段ボールの中に、その手掛かりは残っていないかった。それ以外にも、工場の給与明細の束や永年勤続を称える表彰状も入っている。

「この方たちに知らせてあげないとね」

母が一枚一枚年賀状を捲りながら呟く。叔父には、離れていてもこうして繋がっている友人たちがいた。果たして、僕はどうだろう。もし僕が死んだら、知らせるべき人がいるだろうか。交友関係についても、僕は部屋と同じように考えている。もともと一人が好きだし、気を遣う会社の飲み会なんかも出たくない。だから親しい友人もいない。欲しいとも思わなかったし、恋人ができた時は彼女さえいればそれでいいと思っていた。その恋人もいなくなってしまう訳だが。

「叔父さんはなぜ、古い年賀状なんて取っておいただろう？」

母親に尋ねてみた。

「なぜって、大切な人からいただいた物だからでしょ」

「年賀状なんて、正月に見たらそれで終わりじゃないか。ただの挨拶状なんだから」

「印刷されたお孫さんの写真を見て、去年より大きくなったなあと思ったり、遠くにいる友人が元気にしているのを知って安心したり、年賀状はただの挨拶状じゃないのよ。残された人生の時間が少なくなると、物に込めた想いまで捨てられなくなるのよ。圭司はまだ若いから分からないでしょうけど」

たしかに分からない。じゃあこの家に溢れている物すべてに、叔父の想いが宿っているとでもいうのだろうか。

それから僕たちは全部の部屋を見て回り、まだ使えそうな物——箱に入った未使用の食器や庭にあった鉢など——を母が持ち帰り、その他は遺品

整理業者に頼むことにした。

その日の夜、僕は夢を見た。その夢は、恋人との最後の記憶だった。

「どうして捨てたの？」

彼女は泣いていた。

「時計は毎日使ってるよ」

誕生日に彼女からもらった腕時計。それと一緒に入っていた手紙を僕が捨ててしまったことに、彼女は怒っていた。

「初めて書いた手紙だったのよ」

「ちゃんと読んだよ」

なぜそんなことで怒っているのか、その時の僕には理解できなかった。手紙の役割は、送った相手に書かれた文を読ませることだ。僕が読んだ時点でその役割は果たされ、役目を終えた手紙の存在意義は失われるのではないか。

「いつか、その手紙を読み返そうと思わなかったの？」

泣き腫らした目で僕を見る。

「例えば、いつか二人の子どもができた時、お母

さんからもらった初めての手紙だよって、子どもに見せてあげようか思わなかった？」

僕は何も答えられない。

「圭司くんにとって、大切な物じゃなかった？」

その翌日、彼女は家を出て行った。

夢は昨日の出来事のように鮮明で、心の痛みは目が覚めた後も残っていた。

あれは、二人の未来に向けた手紙だった。そこに書かれていたのは、彼女の大切な想いだった。

なのに、僕は……。

いくら部屋の物を捨てたって、心の奥底に残る物までは捨てられない。悲しみも、寂しさも、幸せだった日々も、そして後悔も。

そんな簡単なことに、僕は今さら気がつくのだ。

## 踊り子おどこ

高知市 久尾 さとな

午後八時四十分。

開演の時間だ。

三十人ほどが入る小劇場は、開場前から行列ができ、満席だ。客席整理のスタッフに誘導されるがまま座った自由席は、なんと最前列だった。背もたれがない小さな椅子に膝を抱えるように座った洋子は、苦笑いをおさえる事ができなかった。

「冗談でしょ」

ちようど目の高さにステージがあった。観客席との間には、手すりのような鉄柵が設けられてはいるものの、手を伸ばせば、出演者に触れられる距離だ。相手の一挙一動、瞬きまで、よく見えるだろう。舞台鑑賞なら特等席だ。ただ、洋子にとつて、そうとは限らないが……。

今夜、ここに来て本当に良かったのだろうか？

ここ一週間の出来事が思い出される。汗ばんだ体に、エアコンの冷たい風が容赦なく吹きつける。せめて、自分と同じような条件の観客がいれば、少しは気が楽になるのに……。三十五歳。女性。一人。仕事帰りで、ジャケット姿。そして、ストリップ初鑑賞。

洋子が、キョロキョロと場内を見渡していると、照明が暗転した。

「劇場からのお願いです。場内の撮影は禁止。踊り子さんの体や衣装には、お手を触れないよう、よろしくお願い致します。それでは、素晴らしい夜を」

威勢の良い男性のアナウンスが響いた。待つてました！と言わんばかりの大きな拍手が、常連客であろう席から沸き起こった。狼狽える洋子をよそに、場内の空気は、どんどん熱くなっていく。クーラーで冷えた洋子の体が、更に縮こまった。

「ストリップ、観に来ませんか？」

一週間前、教室で彩乃あやのに面と向かって言われた

時、洋子は自分の耳を疑った。

「……えつと、え？」

「来週、私の出番なんで、観に来て下さい」

柔らかな笑みを浮かべながら、彩乃は洋子を見つめていた。十九歳。まだ十代の、あどけなさが残る目の輝きがあつた。

マンガ専門学校で担任を務める洋子にとって、彩乃の言葉は、完全に想定外だった。学校の特性上、皆、マンガやアニメに夢中で、大人しく自分の席に座っている生徒が大半だ。彩乃も、その一人だと思っていた。

「あと、今日で退学します」

彩乃が話すたびに、肩で切り揃えられた黒髪が揺れた。

「二学期から登校しません。引越し費用も貯まったんで、劇場が管理する寮へ移ります。住所が変わるんで、できたら今、退学届を出したいんですけど」

次から次へと飛び出してくる彩乃の言葉に、洋子は目眩がした。

七月二十日の正午。二年生の一学期最後のホームルームを終えた直後だった。生徒達は、チャイムが鳴るや否や、夏休みを満喫しに、街へ繰り出した。教室には、洋子と彩乃の二人だけだったが、まだ校内に人は残っている。

「……ここで話しても大丈夫なのかしら？ 退学と……、その……ストリップ……」

洋子にとって、ストリップと言えば、女性が舞台上で全裸になり、閉ざされた空間での秘め事というイメージだった。

「演劇関係のツテで、十八歳から一年、働いています。意外とバレないものですね」

「一年……」

淡々とした彩乃を見て、洋子も平静を装おうとしたが、声が上がってしまった。だが、担任と生徒という関係上、冷静に話さねばならない事はある。

「二年生で卒業だけど、それでも辞めたい？」

「はい」

「親御さんは了承してる？ 二年生の授業料、全

額が振り込まれてる。返金できないのは知ってる？」

一瞬、彩乃の体が強張った。顔からは笑みが消えていた。

「退学の事、親には話していません。ストリップの事も。だって絶対、反対されるから」

彩乃の言葉に力が入る。

「私、舞台上に立ちたいんです」

「舞台って、ストリップの事？」

彩乃は、首を横に振った。

「ストリップだけじゃなくて、演劇。表現者って言うべきなのかな……。自分の全身、全霊で、色々な世界を舞台上で表現したいんです」

表現者——洋子の胸がざわついた。

「ウチの両親、人前に立つ事が大嫌いで、私にもうるさいんです。バイトしながらの演劇活動も大反対。学校で大人しくしてろって」

溜息まじりに彩乃は言った。

「それで、マンガ専門学校に入学？」

「一応、何かを表現するって点は同じだし、絵が

下手でも、適当に課題さえ出せば、劇場のステージに立つ時間もできるから」

彩乃の言葉が、洋子の胸にチクリと刺さった。その小さな傷口から、洋子の中にある黒いものが、体じゅうに染み渡り、洋子を苦しくさせた。

「つまり、あなたにとって、適当で都合の良いものってわけね」

吐き捨てるような洋子の言い方に、彩乃は思わず、たじろいだ。

「……す、すみません。私、馬鹿にしたつもりはなくて……。先生、すみません……」

一気に張り詰めた空気に触れ、彩乃の目は潤んでいた。洋子自身も、棘のある言い方になってしまった事に、戸惑っていた。

「私も……。ごめんなさい……」

嫉妬。洋子の頭の中で、この二文字が渦巻いていた。この学校を卒業したとしても、皆が皆、プ口的漫画家になれるわけではない。洋子も、その一人だ。表現者として、他人に認められるのは、ほんの一握りだ。

かつて、この学校で共に学んだ旧友や、受け持った教え子達に、スポットライトが当てられるたびに、洋子は自分の中に黒いものが溜まっていたのを感じていた。

自分は、表舞台に立つ彩乃に嫉妬している。立っているステージすら違うのに。

そう自覚した時、洋子は自分の情けなさに涙があふれてきた。これ以上、彩乃の顔をまともに見る事ができなかった。

「ストリップ、観に行くから。絶対」

洋子は彩乃に背を向け、足早に教室を立ち去った。

暗転した劇場のステージを、青い光がゆっくりと照らしていく。丁字の先にある円形のステージを囲むように客席が並べられていた。しつとりとした音楽が、ここ一週間で擦り減った洋子の心を優しく包み込んでいく。

彩乃の両親には、洋子から電話で、彩乃が退学を希望している旨を伝えた。当然、納得してくれ

るわけない。担任の洋子、校長、彩乃の両親とで、話し合いの場を設ける事になった。彩乃の決心は固く、同席はしなかった。学費の支払いは、全額終えているので、在籍という形で、とりあえず落ち着いた。だが、必要な出席日数がなければ、卒業はできない。

洋子は、ストリップの事を誰にも話さなかった。彩乃の足を引っ張りたくはなかった。形は違えど、同じ表現者としての、洋子の最後のプライドだった。

舞台袖から、素足の踊り子が現れた。

真っ白いレースの羽織物の下に、艶のあるスリップが透けて見える。柔らかな月の光のような照明を浴びる女性は、彩乃だった。

音響と照明とが作り出す世界に浸りながら、一歩一歩、歩を進め、やがて中央の円形のステージに立った。レースの羽織物が彩乃の体を滑るように足元へ落ちた。スリップ姿の彩乃は一人、しなだれるように座り込み、指先、足先まで美しく丁寧にポーズをとっていく。彩乃の黒髪が照明に照

らされ、艶々と光る。

肩からスリップの紐が落ち、彩乃は一糸まとわぬ姿になった。円形のステージが、ゆっくりと静かに鈍い音を立てながら回り始めた。洋子の目の前で回るステージは硬く、ひんやりとしているように見えた。洋子は、彩乃の膝が床で擦れて、薄っすらと赤くなっているのに気付いた。だが、彩乃は痛がる素振りを全く見せず、舞台上の世界を慈しむかのような表情をしていた。

「すごい……」

洋子から溜息が漏れた。

生半可な覚悟では務まらない、圧倒的な存在感だった。観客全員が、彩乃の全てに目を奪われていた。まるで、世界が彩乃中心に回っているかのように思えた。

彩乃以降の出演者のステージが終わり、洋子が劇場の外に出られたのは、午後十時を過ぎた頃だった。劇場の表の通りで、Tシャツ姿の出演者達が、観客を笑顔で見送っていた。

洋子のそばに、彩乃が駆け寄ってきた。

「本当に来てくれたんですね。先生」

洋子は、首をすくめた。圧倒的なパフォーマンスを見せられた相手に、先生と呼ばれるのは、何だか落ち着かなかった。

「先生って呼ばれるのは、もう変な感じ」

彩乃は、きよんとしていた。

「私にとっては、先生ですよ」

洋子には、この一週間ずっと、彩乃に聞きたい事があった。

「どうして、私をスリップ劇場に誘ってくれたの？」

彩乃は、目を輝かせながら答えた。

「先生、人物デッサンの授業で、女性の裸を描くのが、すごく上手だったから」

意外な答えに、洋子は吹き出してしまった。

「そんな理由で!? 単純ね」

「単純なんです」

二人の笑い声が、夜の街にこだました。

## トウルルル

高知県立大学 黒河光貴

「ねえあんた、スマホ触るのやめなさい」  
夕飯の時、母の切りつけるような言葉が飛んできた。私はドキリとして、スクロールしていた指を止める。

「友達から連絡が来てたの」

「後でいいじゃない。食事のたかが十数分」

「高校生はその十数分も無駄にできないの」

「その割には時間の無駄遣いしているようにしか見えないけど」  
顔を上げる。母さんはお茶碗を持ったまま白けた目をしていた。

私はお茶碗を掴むと、よそわれた白ご飯をかき込んだ。おかずのアジフライ、キャベツの順に詰め込み、味噌汁で流し込む。

母はまたため息をついた。

「成績が落ちるようなら、解約す——」

「ご馳走様」

母の言葉を遮った私は、お茶碗を置いて椅子から立ち上がった。スマホを掴み、自室への階段を上っていく。

「待ちなさい」

そう呼び止められたが無視をする。雨の中を走るみたいに進み、自室に飛び込んだ。

その時、友人からの返信があった。他愛のない、「晩ごはんハンバーグだった」という内容。だから私は「アジフライ」と返した。

そうしていると、部屋の扉がノックされる。

「ねえ、ドラマ始まってるけど、見ないの？」

母の声。もう九時なのだと気が付いた。

「後で行く」

そう答えると、母の足音が遠ざかって行った。私はまた、友人との会話に興じる。十分くらいで終わらせるつもりだったが、結局、一時間続いた。ドラマはまあ、配信があるし、その時に見ればい



いと思った。

お風呂呂に入って、眠ろうとベッドに向かった時、またスマホが震えた。私は寝ぼけ眼でメッセージを確認し、どうでもいい会話に機械的な返事をしていった。

翌日、私は寝坊することになる。あのまま寝落ちしたから、目覚ましをかけ忘れたのだ。

「なんで起こしてくれなかったの！」  
「起こしたわよ！」

母と言いかう時間も惜しい。

私は転げそうになりながら制服に着替え、顔を洗い、テールに置いてあった弁当を掴んで家を飛び出した。

「待ちなさい！ 今日日は——」

何か言った気がしたが、振り返らなかった。

始業まで残り五分。私は学校に辿り着いた。その五分の余裕が、ふやけた頭を冷やす。

母さん、何を言おうとしたのだろう。

そう思った時、教室の外で雨が降り出した。雨粒は最初霧のようだったが、一時間目が終わる頃

には弾丸のような勢いを持って校舎にぶつかり、分厚い雨雲は光を遮り、辺りは夕時みたいな暗さとなった。

「夜まで続くらしいよ」

何処からともなくそう聴こえて、私ははっとする。鞆の中を覗いたが、折り畳み傘は無い。そこで、ああそう言うことか……と思った。

まあ、母さんに迎えに来てもらおうか。

昨日の今日なので、あまり連絡はしたくなかったが、仕方ない。鞆からスマホを取り出し、母にメッセージを送ろうとした。

電源ボタンを押して気が付く。充電が残り一パーセントだった。ああ、そうか、昨日寝落ちしたから、充電をしていない。

慌てて指を動かしたけれど、間に合わなかった。「雨降っているから迎えに」というところまで入力したところで、電球が切れるみたいに、画面が真っ暗になる。その後はうんともすんとも。当然充電器は持っていない。

全身の血が冷える。太平洋の真ん中で、顔だけ

を出して藻掻いているかのような感覚。

いや、まだ大丈夫。学校の近くに公衆電話があったから、それを使えば良い。いや、ダメだ。お金を持つていなかった。最近、電子マネーでの買い物ほとんどだったから、財布を部屋に置きっぱなしなのだ。

「まじか」

万策尽きた私は、頭を抱えて机に伏した。

天罰ってやつだろう。

私を置いてけぼりにして時間は進み、二時間、三時間と経った。幸い、その時間が私を吹っ切れさせた。昼休みになって、私は濡れて帰ることを覚悟したのだった。

嫌だなあと思い、でもこれは天罰だからと言い聞かせ、弁当の包みを解く。出てきたのは、可愛げのないプラスチックの弁当箱。

その上に、見知らぬポチ袋が置いてあった。クマさんの絵が印刷された可愛いもので、裏面を覗くと、母さんの字で「お茶を沸かしていなかったので、これでジュースを買ってください」と書い

てあった。引っくり返すと、百円玉二枚が転がり出る。

思わず「あ」と声が出る。薄暗かった視界の端に光が差した気がした。

放課後になった。雨はまだ止む気配を見せず、荒い雨粒がアスファルトの上で踊っていた。私は、頭にタオルを乗せた格好で校門を飛び出し、すぐそこを右に曲がり、先にあった電話ボックスに飛び込んだ。

たかが五十メートルの移動だったが、制服が濡れて肌に張り付いた。寒くて、ぶるりと震える。タオルで肌を拭くと、気を取り直し、公衆電話を眺めた。

抹茶色の公衆電話。最後に使われたのはいつだろうか。手入れはされているのだろうか。とにかく埃が降り積もっていて、心なしか黴臭い。足元で、温い湿気が微睡むように横たわっていた。

深呼吸ひとつ。塗装に亀裂が入った受話器を掴むと、百円玉を投入し、母の電話番号を入れる。そして、耳に押し当てた。

トゥルルルル……トゥルルルルル……  
懐かしさを感じる、無機質な呼び出し音。

『もしもし』

母の声が聴こえた。

「あ、母さん、私だけだ」

落ちたものを掴むように言った。

「ごめん。今日、傘忘れちゃったから迎えに来てくれない？」

「ただ、一秒、二秒、三秒と待っても、母の声は返ってこなかった。その間も雨粒はボックスのガラスを叩いている。目を覚ました湿気がローファーに噛みつき、足元がとろけるような気がした。くらくたと眩暈。それと同時に罪悪感が込み上げ、私は首を横に振った。」

「ごめん、何でもない」

母さんに酷いことをした。こんなことを言える立場にない。

「ごめんね、朝、怒っちゃって」

一方的に言って、受話器を置こうとする。

その時だった。

コンコン……と、電話ボックスのガラスが叩かれた。はっとして振り返る。そこに立っていた者を見て、私は「あ」と間抜けな声を洩らした。

そこにいたのは、母さんだった。右手で傘を差し、左手でスマホを握っている。その脇には、私の折り畳み傘が挟んであった。

私は、思わず安堵の息を洩らしていた。すっかり呆けてしまい、目の前に母がいるというのに、受話器に向かって話しかける。

「来てくれたの」

母さんは一瞬面食らったような顔をしたが、すぐに笑い、スマホに話しかけた。

『あなたが困っているだろうと思って』

「そっか。ありがとう」

『でもなんで公衆電話。スマホは』

「充電が切れたから」

あらまあ……と聴こえた。

『お金はどうしたの？』

「ジュース代を使った」

『お釣りを使ったの？』

「いや、百円玉を」

そう答えると、母さんは目をぱちくりとさせ、腹を抱えるような仕草をした。

『それ、お釣り出ないよ』

頬が熱くなるのがわかった。

「いや、相場が分からなくて」

そう言いかけたが、そういえばそうだった気がする。惜しいことをした。

「ごめん」

『もういいわ。たかが百円。あんたの通信費に比べたら大したことじゃない』

母さんは吹っ切れたように言い、私に手招きをした。

『ほら、おいで。帰るよ』

私は頷くと、受話器を置こうとする。だけど、また耳に押し当てた。

母さんは、おや……と言いたげな顔をして、気を引き締めるようにスマホを持ち直した。

『どうしたの』

「いや、もうちょっとお話ししない？ お金が切れ

るまで」

受話器から伸びるカールコードをなぞりながら言う。

母さんのため息が聴こえた。

『全くこの子は』

一瞬、路地の様子を確認した母さんは、また私の方を見た。髪を揺らして、首を傾ける。

『十分くらいあるよ？』

「そうなの？」

十分間もお話するなんて、恥ずかしいな。

『まあいいわ。スマホ充電しちゃったら、あんた私と話してくれないからね』

笑みを含んだ皮肉が、私の鼓膜を揺らす。

「ごめんなさい」

昨日のこと、今朝の事、いや、最近のことを思い出しながら謝罪の言葉を口にする。それから顔を上げ、洗われたような透き通った声で問うた。

「昨日のドラマだけどさ、録画してたよね」

『うん、しているよ』

「後で一緒に見ない？」

『いいよ』

ガラス越しに、母さんが頷いた。  
雨はまだ止まない。

## おばあちゃんの鍬

高知市 森田 妙

おばあちゃんの葬儀を終えて貞子は一里半の村道をバス停迄歩いている。尾根を一つ廻る度におばあちゃんの村がだんだん小さく遠くなっていく。三つめの尾根を廻るととうとう見えなくなる。

「さようならおばあちゃん。長い間ありがとう。おばあちゃんの一番大切なもの形見にもらっていただくからね」

肩に担いだおばあちゃんの鍬の柄をしつかりと握りしめた。

五月の日没前の車窓をぼんやりと眺めながら、バス、汽車を乗り継いで貞子は帰る。

無学と言いながら何でも知っていた、無口で働さきで優しかったおばあちゃんだった。

物心ついてからの四十年余のおばあちゃんとの

あれやこれやが、次々と頭の中をよぎる。

長い一日を終え、襲ってくる悲しみと疲れを感じながらも、おばあちゃんとの絆、深い愛情に胸が一杯になっていく貞子だった。

幼い頃は町で暮らしていた貞子は、大陸での戦争のため海を渡って異国で父は戦死した。母と二人母の実家の山村に帰ってきた。一人暮らしのおばあちゃんだったので田畑はあまり広くはないが、細々とした三人の生活が始まった。町での生活とは全く違う暮らしに初めはとまどっていたが、貞子はだんだん百姓が好きになり、小学校に入る頃からおばあちゃんについてよく畑に行くようになった。

「貞子ざる箒を持って畑に行くぞ」

「えっ、もう手も足も洗ったのに」

「明日は雨じゃ、あっちの兵隊と豌豆えんどうは雨が降ったら笑う」

豌豆が笑う、あっちの兵隊とは誰のこと、何やら判らないままとにかく箒を持っておばあちゃんについていく。

「雨が降っても日本の兵隊さんはちゃんと戦争するが、よその兵隊は休むのや、だから雨が降ると嬉しゅうて笑うのや、豌豆も口を開けて笑うのや」

判ったような判らんようなまま貞子は畑に入っていく。

「青い豌豆はとつたらいかん。しつかり実って口を開いているのをちぎるのや」

来年の種にしたり、保存用らしい。

「明日の雨どうして判る」

「ああ、野老山のサイレンが聞こえた。西から雨が降ってくる。汽車の汽笛が聞こえたら日和や」

「おばあちゃんは何でも知っているね」

「百姓は天気が一番大事や、こんなこと百姓はみんな知っているのや」

雨が降って豌豆が笑ってポロポロと土にこぼれたら駄目になるのかと貞子は思った。

分家の祖父の所へ十六歳で嫁入りしてきたおばあちゃん、祖父は体が弱くて畑にはゆかず本ばかり読んでいたのでおばあちゃんはいつも一人で畑

仕事していたそうだ。

「わしは無学で読み書きはできんが、体だけは丈夫や、百姓は好きや」

口ぐせのようにいつもおばあちゃんは言っていた。

「貞子、蒟蒻こんやくを作るぞ。畚かごと鎌を持って畑に行くぞ」

「えっ畑にあの蒟蒻があるの」

何だか判らないままおばあちゃんについていく。畑の中に少し赤みがかり黒い模様のある三十糎センチ程の茎、まるでキノコの首のよう。おばあちゃんが根元に一と鍬入れるとほこりと大人の拳ほどの芋が出てくる。なんだ蒟蒻でなく芋かと思いつながら鎌で茎を切り落とし畚の中に五、六ヶほうり込み帰ってくる。

「さあ貞子、蒟蒻を作るぞ」

昨日掘ってきた芋をきれいに洗い大きい釜でゆでる。ポカポカと浮きあがってくると取り出し、フーフー言いながら皮をむき臼の中にほうりこむ。

「さあ貞子頑張るんやぞ。しつかりと踏むのだぞ」

長い丸太棒の端を踏めば杵が落ちる。餅つきの際のよばストンと臼の中に杵が落ちる。餅つきの時のように水で手をぬらしておばあちゃんがまぜる。ねばってくるのだんだん重くなる。両足をのせ力を入れる貞子、

「ほーれもう少し、トンカラリトンカラリ頑張れ頑張れ」

おばあちゃんの掛け声に励まされる。踏みそこねるとおばあちゃんの手がつかれると貞子は思い一生懸命頑張る。

「ほーれできたぞ」

急いで臼の所へ走る。覗くと真白だった芋が単色わすみに変わりコリコリしている。何か入れたのかな、おばあちゃんは魔法使いみたいやと貞子は思った。

「今晚は蒟蒻と大根の煮染めだぞ」

おばあちゃんの作る煮物も蒸し饅頭もみんなおいしい。

「おばあちゃんは蒟蒻も、味噌も醤油も何でも作るねえ」

「そうはいかん、豆腐や塩、砂糖なんかは作れん」

そう言えば時々川向こうから天秤棒担いでおじさんが豆腐を売りにくる。鮎の干物も持っている時もある。チャラチャラと袋からお金を出しておばあちゃんが払っているのをみて、

「どこにそんなお金あるの」

貞子が聞くと、

「そうやねえ、時々農協のお兄さんが鞆を持ってくるやろう。米や麦、大豆、小豆など農協に売ったお金を預かっていてくれて、来た時いるだけ置いていってくれるのや」

そうか一粒のお米もお金になるのかと貞子は穀物を大切にせんといかんと思った。

柿、みかん、苺など季節毎に庭や畑にあり胡瓜やトマトもちぎって塩をつけて食べた。

いつの頃だったかおばあちゃんの大切な水飴をこっそりなめた。次の日もその次の日も、



「おいしかったかい」

壺を見せておばあちゃんにはっこり笑った。なんだ知っていたのか、でもおばあちゃんは叱らない。私もこんなおばあちゃんになりたいなとその時思った。

小学校高学年になった頃戦争が激しくなり町では食糧難が続いた。でもこの山里は静かで平和だった。おばあちゃんの家にはいつもおいしいものがあつた。

戦後少し町が落ち着いてくる頃、

「これからは町が良くなる。百姓はわしで終わらせる。お前達は又前のように町へ帰るとえい。貞子も町の学校へ行つて、いい仕事をして今頃麦飯を食べてふとりゆうろう人の嫁さんになって幸せに暮らさにかいかん」

と言うおばあちゃんにすすめられ母と二人町へもどつた。

だが、中学高校時代は休み毎にあの山里に帰りおばあちゃんと畑に出かけた。盆踊りも一緒にみに行った。どうしてかこの山里は居心地が良い。

きつとやさしいおばあちゃんが居るからだろうと貞子はいつも思った。

社会人になるとおばあちゃんの村へ帰ることが少なくなり、ひらがなばかり所々間違ひ字のあるおばあちゃんの手紙が時々届くようになり、貞子も、ひらがなばかりの手紙を送った。一人生活のおばあちゃんにとつては一番の楽しみだったかも知れない。

貞子が結婚の話が決まった時おばあちゃんから思いもよらぬ高額の祝金とお祝いの手紙が届いた。長い間畑仕事を手伝ってくれたお礼と二人で色々なことをしたことが楽しかったことなどが、たどたどしい文字で綴られていた。その一字一字におばあちゃんの真心と優しさがあふれていた。おばあちゃんも母も若くして夫に先立たれていたので貞子は夫と長く添いとげることをおばあちゃんと約束した。

三人の子育ての頃体調をくずしたおばあちゃんを町の病院で診察してもらうため貞子は連れてきた。でも田舎の病院の見立てとは変らずしばらく様子をみていたが、やはり田舎に帰ることとなった。

貞子の夫の前にきちんと座ったおばあちゃんは、深く頭を下げ、

「あんたは本当にいい人やねえ。貞子や子供達をよろしゅうたのみますよ」

と言って夫の手をしっかりと握った。

あの時おばあちゃんが麦飯を食べてふとりゆうろうと言ったのがこの人だとそんなこと憶えているのだろうかとおばあちゃんはおかしかった。汽車のホームで窓にすがり頭を何度も下げていたおばあちゃんを見送ったのがおばあちゃんとの最後となったのだ。

葬儀が終わる叔母と二人おばあちゃんの部屋で話をしている時、

「あんたは本当におばあちゃん子だったねえ、お

ばあちゃんはいつもあんたのことばかり話しよつた。あんたの手紙を出してきては読んで手ですつていたよ。何でもいいからおばあちゃんの物形見に持って帰り」

貞子はしばらくだまって座っていたが、ついと立ちあがり外に出た。主屋の裏の農具小屋へ、鍬や鎌、農具が所せましと掛けてある。おばあちゃんの鍬を探す。いつも腰を少し曲げて肩にかつぎ行ったり来たり、畑の真中でひと休みする時は鍬を立ててその先に顎をのせて目をつむっていた姿が頭の中をよぎる。いつも握っていた所がへこみ縦に幾筋もの割れ目が走っている。持てばおばあちゃんの匂いがする。おばあちゃんの大切な物はこれしかない。

こうして今悲しい一日が終わろうとしているおばあちゃんとの四十年をかみしめながら、これからはずつと一緒だよと言いながら我が家の門をくぐった。

詩



## 不夜城の病舎

高知市 都 築 悦 子

和さんが風呂敷包みを抱えている

「今から帰らせてもらいます」と言う

「遅いので明日にしましょう。」

「今晚はここで泊って下さいね。」と

説得する私

「どなたか存じませんが親切に」と

和さんは病室にもどって行く

何度も同じ会話をくり返し

ようやく和さんに眠りが訪れた

解いた包みの中は

着替えとミカン一個

小さなミカンは夕食の膳についていた

家族への手みやげ…

黄昏がせまってくると

源さんの夜間勤務が始まる

「右よし・左よし」「出発進行」

「高知行きの最終」と促され

乗客となる私

挙手で見送ってくれる源さん

源さんは今夜も眠れない

西の空が夕焼けに染まる頃

帰りたいとつぶやく人

娘が面会に来てくれないと嘆く人

「ほんとう」に満ちた

せいっぱいの嘘で

娘になったり孫になったり

知らない人になったり乗客になったりの

私たち

嘆きや躁り言を乗せて

私たちもゆれながら

明日へむかう不夜城の病舎

嘘

高知市 露 口 奈津子

うそをついたら背中に松の木が生えると  
おばあさんが おんちゃん  
背中にできた腫れものに  
匂う草の葉をのせもって  
こんなになるがよと祈るように言うた  
あのおできは松の木をのけたあとじゃと  
おんちゃんは黙ってだまっ  
うつぶせになっちよった  
私は嘘はつかんと心に誓った  
あれからはや七十五年たった  
何遍も嘘をつきもって生きてきた

けんど 松の木ははえんかった  
けんど 心の中が傷だらけになった  
瘡蓋をむりやり剥がいては血が出た  
こそばゆうて 気持良うて 虚しかった

こないだ あの人が死ぬる時  
泣かずに手を握って見よった  
心電図が まっすぐになつて  
嘘じゃうそじゃと言いもつて  
泣いた  
いつの間にか 夜が明けていた



## 花を摘む日

高知市  
山田草花

指先に咲いた花を

つぶさないように暮らしたい

触れることも生み出すことも

私は一切の生活を放棄して

両手を机の上に置いたまま

ただ、花を見つめている

二年前に買った鶯色のカーデイガンは

顔に似合わず 虫食いだらけで

ただ 野花がてんと咲く

のどかな芝生のようで

手放せない

指先に咲いた花は 小さく 赤い  
刺さった針を抜いた後に現れる  
まるい 粒のような赤

この花を摘まれたら  
どれだけ痛いだろうか  
生けて飾る大きさでもない  
小さな花を訳もなく摘む  
理由があるとすれば  
わたしの手に触れたいばかりに

誰かにやさしく手を包まれ  
花が  
ぐしゃぐしゃにつぶれる様子を想像する  
その時 喜びが痛みを超えるだろうか

両手を机の上に置いたまま  
いつしか私は  
いつまでも枯れない花を

憎らしく思うようになり

てんてんと野花の咲く

のどかな芝生に自分がいないことを知り

さあ、虫食いを繕わなければと

## ちよつとつらい話

高岡郡佐川町  
結城理恵

動物園はちよつとつらいね  
きれいな花も咲いてるね  
カンガルーはかわいいね  
ゾウもカバもなんだかいね  
サルたちはえさの取り合っているし  
ライオンはほんやり遠くを見ているね

動物園はちよつとつらいね  
大きな木がたくさんあるね  
ペリカンがドームの天井に  
ぶつかってるね

タカは獲物をとらないし  
小鳥たちはここを宇宙だと思っているね

動物園はちよつとつらいね

アイスクリームも売ってるね

うさぎやモルモットを追いかけて

子供たちは楽しそうだね

少しだけ

気のふれたプレーリードッグが

何度も壁に激突してるね

トラは意味なくぐるぐる回って

やっぱりバターになるんだらうね

動物園はちよつとつらいね

クマもラクダもまだ見てないね

ワニの池にも行こうかしら

楽しそうに笑ってみるけど

だんだん息がつまってくるね

わたしも檻の中に居るのかな

動物園は ちよつとつらいね

## 同窓会

香南市 町 猫

歳を重ねて友と会う

再会を喜び

今までの会えなかった時間の話をする

ひとりひとりが紡いだ人生

その一枚の織物は

完成図が見えてきた

こんなことあんなこと

昔はいろいろあったねと

懐かしさで胸がいっぱいになる

若き日の罪も

記憶が書き換えられていることに気づく

時間という魔法は

セピア色の黒歴史を  
穏やかな海の色に変えて  
本当に変わったのか  
記憶を書き換えたのか  
変わったことにして  
自分の人生に折り合いをつけたのか  
そんなことは  
もうどうでもいいこと  
若き日はとうに過ぎ去ったのだから  
みんなもうアラカン  
この年まで生きると  
人には言えないことも誰もある  
きつと隣で笑っている友にも  
苦しみ涙し耐えた日々が  
そして私にも  
つかの間の同窓会は  
カボチャの馬車に乗って来た舞踏会  
日常から解き放たれた  
魔法がかかっている  
笑顔でまたねと手を振りながら

魔法がとけたそれぞれの大切な  
今いる場所へと帰っていく



## 学びという構造物

須崎市

倉

橋

孝

彰

君、学校に行けないくらいで  
落ち込んだらダメだよ  
たかが  
学校に行けないくらい

学校には門があつて  
階段があつて教室があつて  
黒板があつて座席と机がある  
でも

そこは学校という  
ただの敷地と建物

窓の外には校庭が見え

時間割があつてチャイムが鳴る

教壇に立つ先生がいて

黒板に向かう生徒たちが座っている

君、たかが学校に行けなくなっただけで

死んじゃいけないよ

あれは友達の声か

もしかして生涯の友かもしれない

あれは先生の声か

もしかして人生の師となる人かもしれない

でも

失われるはずはない

君には必ず席がある

生涯の友と人生の師とが

君を待っている

学びという構造物と人とが

ずっと待っている

あれはただの建物  
あれは学校という名の  
構造物

四季の風

高知市  
古  
田  
彩  
香

夏の風は簾すだれを揺らし風鈴と挨拶をかわし  
やさしくうたた寝を誘う  
涼風はつかの間のやすらぎ  
夏の風は海を渡る  
歌声に満ちた街はもうなく  
晩夏は山のむこうの秋を呼ぶ

秋風は茜色あかね  
芒すすきの道を探ね来る  
静かに秋を告げながらふるさとを思い出させる

淋しいことはありませんか？

風は問いかける

旅人は頷くだけで目をふせる

月明かり 秋の夜長 虫時雨しぐれ

北風は雪景色の中を尋ね来る

見知らぬ人に出会うかのように

そつと横に来てまっすぐに目を見る

厳しさに耐えられますか？ 夢見る人に問いかける

厳しくもやさしい風の懐ふところ

厳冬を一緒にいてくれる君よ友よ

夏 秋 冬のあと

幸せをいっぱいいつれて来るはずだった春風は

青空の深くにある沢山の傷を語り

未来が幸せでありますようにと手を包む

そして足早に春風は

またねと大きく手を振る

春風は母のまなざしのように

またねと旅人を見送る

御厨人窟みくろど

高知市 甫木 恵美

弘法大師は  
御厨人窟で  
悟りを開いたという

御厨人窟から見える  
空と海に感銘を受け  
自ら空海と名乗ったと伝えられている

わたしは  
御厨人窟で  
反響する波の音に揉まれる

御厨人窟の中の岩肌は  
水の滴りに湿りを帯び  
幾重もの地層が歴史を刻んでいる

臆することなく  
畏敬の念を持って

空と海と交信することができたら

ゆっくりと深く

吸って吐いてを繰り返す

今 生きていくことの  
焦燥と安堵

白波の泡沫うたかたのような  
ちっほけな命

寄る辺ない  
ゆらぎ

それでも  
生きる

生かされている

## 余韻置き場の恋

高知市 小島章生

彼女の余韻が忘れられなかったので、余韻置き場を作った。有り余る余韻を整理するため陳列棚に並べた。そうすれば頭の中も支配される事がない。そして多くと多くの人が見えるように通りに面した風通しの良い場所に置いた。余韻に感化されて町を歩くと、置き忘れた山積みになったりして今にも朽ち果てそうな余韻がどうしようもない眼で僕に訴え掛けて来た。とても小さな陳列棚じゃ足りないから余韻美術館を作ることにした。余韻は日常生活を送るために必要不可欠だった。退屈な時、時間を持って余した時、木陰で読書をしながら珈琲を飲む時に駆け抜けた涼風のように余韻は心地良く浸る事が出来た。僕は美術館の2階に住んで空想と現実の間を自由に歩き来した。

しかしそんな華やかな暮らしも長くは続かなかった。ある日、何の前触れもなく余韻警察が僕の家に乗り込んで来た。僕の暮らしている国では余韻陳列罪は立派な犯罪だった。町中の余韻に心配そうに見守られながら僕は連行されて行った。そして2度と余韻に浸ったり啓蒙したり出来ぬようA Iに取り囲まれて思想教育を施された。僕は真夜中の独房でずっと隠



し持っていた1番大事にしている余韻を握りしめて過去を振り返ってみた。それは如何に浅はかな下心が直感として化合し思考領域まで昇華していく僕という命題形式としての実践の記録だった。所詮この独房も大いなる余韻の一部分にしか過ぎないのだ。

釈放された僕はフラつきながらあらゆる余韻や窓や壁紙が引き剥がされた美術館に帰って来た。そして余韻になる遥か以前の直感や下心や雑多な感情を柵に並べてみた。そして、またしてもここからしぶとく立ち上がろうと力強く宣言した。

## 卒業証書

高知市 栗山文子

一人目は父へ 天寿七十歳

ゴルフへ行こうと幻の靴下を履いていた

モルヒネで朦朧とした目

漁師と間違えられた黒く立派な体は

聖人のように白く細く細く凋んで骨

休日も無い高度成長期の元銀行員

幼くして亡くなった弟が

「お兄ちゃん遊んでよ」と

ひらひらと手を振っていた

二人目は義父へ 天寿八十六歳

ひらひらと赤紙 戦場へと訓練

そして終戦

「ああ 人を殺さないですんだ」

復興してゆく中心街に

家族で力を合わせ繁盛させた自転車屋

いつも美しい景色を追いながら

病床にいても

展覧会へ出す作品のことを気にしていた

「福美」という名前通りに

三人目は義母へ 天寿八十四歳

「順一は朝御飯を食べたかね？」

自分の命が消えかかっているのに

息子を心配する最期の言葉

原爆の日 彼女は広島に住んでいた

その日 急に腹痛を起こし

工場へ行けなかった

「友達は みんな死んでしまった」と

——いいえ みんな ひらひらの天女ですよ

三人も看取れば 変わる心の空  
土砂降りも止み光の階段が下りて来る  
ひらひらと 卒業証書

「右の三名は地上の全課程を

終了したことを証する」

## この世界

東洋町立甲浦中学校一年

手

島

快

元気な子供を見ていると癒やされる

星を眺めていると癒やされる

音楽を聞いていると癒やされる

世界には癒やされることが溢れかえっている

おこられた……

いじめられた……

なぐられた……

この世界が不快

そう思う人もいるかもしれない

でもやっぱりこの世界には  
癒やされることのほうがたくさんある

短

歌





○高知県文芸賞一首

水切りを覚えて孫の夏終わる明日は都会のひとりとならむ

須崎市

土

居

修

○高知県文芸奨励賞五首

核の危機キューバ以来の時来る世界がこれを止めねばならぬ

高岡郡佐川町

渡

辺

俊

平

電話越し耳そばだてる友人のお腹の中の命の音に

高知市

坂

東

千

里

あじさいに雨ぼつぼつと音がするかたつむりにも雨がひとつぶ

土佐市立高岡第一小学校六年

谷

口

梨

夏

球場にカキーンと鳴り響くその一音で僕らは泣いた

梶原町立梶原中学校二年

山

下

朔

弥

母とけんか口きかないが同じ部屋ともに見つめるルンバの動き

清和女子高等学校三年

鍋

谷

ひ

かり

○佳作六首

雲湧ける峠の道を越えて来ぬ軽トラ移動図書館の夏

高岡郡四万十町

川

上

理

恵

弟が母の手つなぎはなさないほんとはほくもつなぎたいのに

土佐市立高岡第一小学校六年

坂

山

智

悠

帰化するか祖国日本へ還るかと十歳との心を母聴きましたし

香美市

竹

村

咲

子

奪われし六十年は還らずも冤罪はれて秋空たかし

高知市

尾

崎

淳

生徒らの三十一文字の夏休み花火よさこい浴衣宿題

香南市

内

山

輝

之

にぎりない魚いっぱいだから好き私のいやし仁淀の青さ

高知大学教育学部附属中学校二年

吉

野

ひ

な

**俳**

**句**



○高知県文芸賞一句

横笛のかけ合ひとなり神楽果つ

高知市

西

崎

さ  
や  
か

○高知県文芸奨励賞四句

サイダーの泡の向こうの平和像

四万十市

胡

南

夏終る青い絵の具と昆虫記

長岡郡大豊町

徳

弘

賀  
年  
子

秋風や五分足らずの渡し船

須崎市

徳

永

逸

夫

あさがおがぼくより先に起きている

土佐市立高岡第一小学校六年

中

井

紘

希

○佳作九句

むき出しの解体ビルや大西日

高知市

山

内

一

美



筋雲は神の旅せし名残とも

南国市

澤

村

正

彦

溝浚へ終へて老後の話など

室戸市

山

本

千

秋

澄む水の中にたしかな風の音

高知市

山

本

敏

子

一人居に家族のごとく燕来る

香美市

山

崎

鈴

子

百歳の父は兵隊雲の峰

高岡郡四万十町

中

森

鶴

子

たんぽぽや飛びゆく命大切に

梶原町立梶原中学校三年

下

元

陽

斗

春風はみんな動かすしれいとう

土佐市立高岡第一小学校四年

武

森

結

菜

天の川貴方も空を見えていますか

高知県立室戸高等学校二年

橋

本

美

裕



川

柳



○高知県文芸賞一句

ブルーシートの海で軍手の紐を解く

高知市

富士田

三郎

○高知県文芸奨励賞五句

かぎかつこ外せばもつと飛べたのに

香美市

藤村

るみ

N o と言うつよさが欲しい雲の峰

安芸市

だい

なつこ

白黒をつけてぷっつり切れた糸

須崎市

徳

永

逸

夫

旅ひとり余生の貨車を組替える

幡多郡黒潮町

黒

岩

せ

ん  
子

夏の夜カレーの中に夏がある

土佐市立高岡第一小学校六年

中

平

瀬

奈



○佳作十句

コスモスはあれもこれもを風にする

吾川郡いの町

岡

林

裕

子

ローマ字のQはおきやんで空虚です

高知市

明

神

永

子

足跡が曲がったまままでついてくる

南国市

橋

田

綾

子

坂道のポストに深い森がある

高岡郡越知町

織

田

裕

一

開かれた空の彼方にガザの死者

高知市

大

野

充

彦

どの音もみな着信と聞いて午後

土佐清水市

辻

内

次

根

さわやかに運命線の立ちあがる

高知市

ますだ

じゅんこ

コロコロと地球儀笑ったのはいつ

南国市

宇賀

祐子

決断に心の点滴欲しくなる

土佐市

小笠原

登

秋の風すすきの穂まで部下にする

土佐市立高岡第一小学校六年

武

森

勇

翔

# 審 查 評



## 短編小説審査評

今年の応募数は三十八編。十四歳から九十二歳まで、幅広い年齢層からの応募があった。昨年より九編少ない。気になるのは十代の投稿数が六編も減ったことである。年によって投稿数に増減はあるものの、若い世代の地盤沈下とまらないことを願っている。

審査の結果、以下の作品が入賞となった。「文芸賞「夜の楽園」」

東京の出版社に勤めていた女性が、体調を崩して郷里にもどり、異業種の会社で事務職をしている。夏季休暇を利用して上京し、再会した元同僚から、その後、東京にもどらないか、とのメールを受ける。夜の植物園をめぐりながら、このこと東京とどちらが楽園なんてわからない、落ちた地で芽を出し、花を咲かせ、種を残し、枯れてゆく、そんなあたり前のことをためらっていた、と思う。簡潔な文章で、地元で暮らすことを選んだ女性の思いがストレートに伝わってくる。

文芸奨励賞「すてられないもの」

叔父が亡くなり、母親と一緒に遺品整理に出かける。家の中はゴミ屋敷のようだった。ミニマリストの僕は、不要なもの捨てるべき、そう思ったが、母親は、捨てられないものもあるから、と論ず。不要なもの処分する、といても、心の奥底に残るものまでは捨てられない。別れ

た彼女との苦い記憶も交えながら、読後、心に残る作品となった。

文芸奨励賞「踊り子」

「マンガ専門学校」で講師をしている女性が、ある学生から、私が踊るストリップを観にきてほしい、と頼まれる。演劇でもなんでも、舞台に立つ表現者になりたい、とのことだった。舞台終了後、ストリップに誘った理由をたずねると、学生は、人物デッサンのとき、先生は女性の裸体を上手に描いていた、と明かす。読みやすい文章で、最後まで一気に読ませる力のある作品だった。

佳作「トゥルルル」

スマホのことで母親と言い争った高校生の娘が、学校へ傘を持ってゆかなかったことから生じる母親とのふれあいを描いている。よく推敲され、清々しい作品となっている。

佳作「おばあちゃんの鋏」

父親が戦死し、母親の実家にもどる。そこで孫娘は祖母から色々なことを教わる。祖母の死後、形見として祖母が使っていた鋏をもらう。真摯な作品で好感が持てた。

その他、「うるこ雲」（永野和美）、「アップデート」（松本幸子）、「高知」（奥田有紀）、「私が死んだら日本中が泣け」（山田草花）なども議論の対象となった。

（審査員——片岡真、米沢朝子、文責・若江克己）

## 詩審査評

応募総数は六十一編。文芸賞は審査員全員一致で、都築悦子「不夜城の病舎」に決まった。夜の病棟内での出来事が温かな視点で描かれている。余分な言葉がなく、描写が軽やかでありながら的確なので、読者は容易に情景を思い描くことができる上、本作品の中で詩の主人公は感傷的になっていない。だからこそ読者が読んで素直に心を動かされる。特に最後三行が良い。「嘆きや繰り返すを乗せて／私たちもゆれながら／明日へむかう不夜城の病舎」。夜も賑やかな不夜城の病舎は「明日へむかう」のである。作者の力量を感じさせる文句なしの文芸賞である。

奨励賞は五編。露口奈津子「嘘」。人間の内面のリアルを、方言を交えて描いている。「うそをついたら背中に松の木が生える」という「嘘」で始まるのだが、「嘘じゃうそじゃ」と言いもつて／泣いた」と作品の結び方には飛躍があり、深みを増している。山田草花「花を摘む日」は、「指先に咲いた花」という比喻を使って葛藤を描いている。花をつぶさないように暮らしたいのだが、花がぐしゃぐしゃにつぶれても誰かにやさしく手を包まれる喜びを想う。そしていつまでも枯れない指先の花をいつしか憎むようになるかも。結城理恵「ちよつとつらい話」は、動物園の情景を点描しながら、その仕草、生き様の面白さや不思議、悲し

みを述べ、最後には動物でもある人間の「わたし」という存在にも目を向けているのが良かった。町猫「同窓会」は、言葉が的確で狂いがなく、「同窓会」の本質を捉えているところが評価された。「カボチャの馬車」「魔法」は安易な表現という意見と、同窓会からの帰りに日常へ戻る時、「魔法」が解けた気持ちになるというのはリアルであるという意見があった。倉橋孝彰「学び」という「構造物」は、「建築物」にしか過ぎないという目の付け所がよい。学校ではない「学びの構造物」とはどんなものか見えるだろうか。視点を変えて世界を見てみようというメッセージが聞こえてくる。

佳作は古田彩香「四季の風」、甫木恵美「御厨人窟」、小島章生「余韻置き場の恋」、栗山文子「卒業証書」、東洋町立甲浦中学校の手島快「この世界」。

詩とは何でしょう。詩とは自らの体験や考えを述べた作文や日記ではなく、長い説明も、理屈もいりません。伝えたいことを一つに絞り、余分な言葉を削り、真情や状況をぴつたり表す自分なりの表現を見つけて、作文から詩へと昇華させることが必要です。名詩を読んでみて下さい。そして自分が書いたものを一読者として客観的に読み、より良い表現を探して何度も書き直してみると、作品はぐっと良くなるはずですよ。

（審査員——林嗣夫、増田耕三、文責・やまもとさいみ）



## 短歌審査評

二百七十五人から五百五十一首の応募で昨年に続き今年も増加。最高齢九十四歳、最年少十一歳で、特に十九歳以下が百七十六名と昨年の一・七倍に増加した。学校も、小学校一、中学校五、高校二、特別支援学校一と九校に増加。若者の短歌への参加は頼もしいかぎりだ。審査の結果、次の六首を入賞とした。

文芸賞

水切りを覚えて孫の夏終わる明日は都会のひとりとならむ  
土居 修

ノスタルジー溢れる「水切り」は、自然の中で過ごした孫のひと夏の成長を象徴するもの。「明日は都会のひとり」と続く下句が、孫歌にとどまらぬ深みのある歌にしている。文芸奨励賞

核の危機キューバ以来の時来る世界がこれを止めねばならぬ  
渡辺 俊平

核戦争への危機が今、急速に高まっている。「世界がこれを止めねばならぬ」との強い声は、まさにノーベル賞委員会が被団協への平和賞に込めた思いに通じるものだ。

電話越し耳そばだてる友人のお腹の中の命の音に  
坂東 千里

夫婦間でなく、遠くの友人が受話器を当てててというのが

新鮮である。聞きたい、聞かせたいと思う親しい間柄だとわかる。

あじさいに雨ぼつぽつと音がするかたつむりにも雨がひとつぶ  
高岡第一小・谷口 梨夏

紫陽花の大きな球形に当たる雨音をよく聴いている。また小さなかたつむりへの雨もしつかりと見ている。観察が優れ調べもよい。

球場にカキーンと鳴り響くその一音で僕らは泣いた  
梶原中・山下 朔弥

勝敗には触れず「僕らは泣いた」とどちら側をも引き込む歌となっている。決定的瞬間を音だけに焦点を集中し、長音符号「ー」を連ねて七音に整え、打球がぐんぐんと伸びていく様を見せている。

母とけんか口きかないが同じ部屋ともに見つめるルンバの動き  
清和女子高・鍋谷ひかり

「同じ部屋」等に、仲直りしたい心境が読み取れる。いつもと変わらぬ動きをするルンバをうらやましく見ている二人。

佳作（六名）

川上理恵、坂山智悠（高岡第一小）、竹村咲子、

尾崎淳、内山輝之、吉野ひな（附属中）

（審査員——梶田順子、山脇志津、文責・田上悦子）

## 俳句審査評

今年の応募人数二百五十二人、応募句数八百三句でありました。参加者年齢最高九十六歳、最少十歳と幅広い方々からの参加を得ることができました。例年のように選者の予選を持ち寄り審査の結果、入賞句が決まりました。

「文芸賞」

横笛のかけ合ひとなり神楽果つ

西崎 さやか

神社で行なわれる里神楽は、笛や太鼓の囃はやしの中で、多く無言で演じられる。芭蕉の弟子曾良そらの「猿蓑ざるみの」に、「むつかしき拍子ひょうしも見えず里神楽」の句がある。時代をこえて、今この句が生まれてきたことはゆかしい。横笛のかけ合いが、いよいよ盛り上がりその中で果ててしまった。終わったあとも緊張はあたりをつつみこんだまま余韻はなおもつづいている。

「文芸奨励賞」

サイダーの泡の向こうの平和像

胡南

平和像の前でサイダーのコップをかわす。もりあがってくる集まりの気が満ちている。いつまでも、平和の世が続

いてほしい。

夏終る青い絵の具と昆虫記

徳弘 賀年子

夏休みの絵を描く。「青い絵の具」がいい。深い色どりに仕上がる。昆虫採集も記録を添えて深まった。充実した夏休みであった。

秋風や五分足らずの渡し船

徳永 逸夫

秋風の過ぎてゆく海を渡る。波を切ってゆく船の様子が見えてくる。時代を超えて続く「渡し船」。生活に欠かせない「渡し船」。お遍路もわたる。旅の人もわたる。

あさがおがほくより先に起きている 中井 紘希

夏休みの記録をのこす。朝は、朝顔からはじまる。充実の日々。作者は小学校六年生。

「佳作」

山内 一美、澤村 正彦、山本 千秋、山本 敏子、

山崎 鈴子、中森 鶴子、下元 陽斗、武森 結菜、

橋本 美裕

それぞれいい句をよこしていただいた。

(審査員——植田紀子、田村乙女、文責・橋田憲明)

## 川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は五百七十六句で、応募総数、応募者とも昨年を上回った。今年の応募作品は、全般にレベルが高く三人の審査員の選考は慎重を極めた。災害を取り上げた作品、戦争への気持ちを表現した句が目についた。その一方で、日常の中のさまざまな想いを十七音字で表現した作品に出会えた。

今年もジュニアのたくさんの応募があり、指導する先生方、ありがとうございます。小学生のびっくりする発想、高校生の生き生きとした日常を感じる事ができた。審査の結果、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

ブルーシートの海で軍手の紐を解く 富士田 三郎

正月の能登半島地震で年が明けた。まるで海のように一面に青いブルーシートが、たくさんの被災された家にかけている。復旧に向けて、沢山のボランティアが現地駆けつけた。被災した家へ、用意した軍手をそれぞれに配って片づけに散ってゆく。南海トラフ地震をいつも意識する高知県民には、ひとごとではない。今を巧みに切り取った一句。

次に、文芸奨励賞。

かぎかつこ外せばもつと飛べたのに 藤村 るみ

私たちは生きてゆくのに、どこかで「これ以上はやめておこう」と、抑制の気持ち働いている。文章のかぎかつこのように、どこかで自分をしばっている。あの時の私が

もつと強かったら、自由に行動したら、その後は変わって  
いたかもしれない。

NOと言うつよさが欲しい雲の峰 だい なつこ

「私でよかったら」と、すぐなんでも引き受けてしまう  
私。嫌な気持ちに相手をさせたくないからだだが、引き受けて後悔する。NOと言う時があるのが自然なのだ。入道雲が「もつと自分を出してもいいよ」と、私の背中を押してくれている。

白黒をつけてぶつつり切れた糸 徳永 逸夫

白黒をつけたい時のころは、少し重たくなっている。  
ころを決めて吐いたひと言で、その人との関係が終わってしまつた。受け流してもよかつたとも思うが、いつかはこうなるのだとも言いかす。そのひと言で、舞台が暗転する時がある。

旅ひとり余生の貨車を組替える 黒岩 せん子

一人暮らしの余生は、けつして悠々でもなく、単調でもない。頼ろうと思つていた人が病氣や認知症になつて、予定が狂つてしまう。あれこれ考えながら、日々の暮らしは続いて行く。旅はまだ終わらない。「貨車を組替える」が巧み。

夏の夜カレーの中に夏がある 中平 瀬奈

小学六年生の作品。「カレーの中に夏がある」の表現にも、大きなはなまる。キャンプだろうか、たくさんの人が一緒にカレーを食べている。汗を拭き拭き、ふーふー言いながら、大人も子どもも口に運ぶ。楽しい笑い声が聞こえてくる。

(審査員——清水かおり、山岡陸宏、文責・小笠原望)

# 令和六年度高知県文芸賞 作品募集要項

五、締切日

令和六年九月三十日（月）消印有効

## 一、趣旨

高知県文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

## 六、作品送付先

〒七八一―八一二三 高知市高須三五三二一

（公財）高知県文化財団内

「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

## 二、主催

高知県・（公財）高知県文化財団

## 七、発表

令和六年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（令和六年十二月十五日に表彰式を行います。）

## 三、主管

高知県芸術祭執行委員会

## 八、選賞

（事務局（公財）高知県文化財団内）

・短編小説

「高知県文芸賞」一名

「高知県文芸奨励賞」二名

・他の部門

「高知県文芸賞」一名

「高知県文芸奨励賞」五名

その他、佳作が選出される場合もあります。

受賞者には表彰状と副賞が授与されます。

## 四、公募作品の部門

短編小説 一人一編

詩 一人一編

短歌 一人三首以内

俳句 一人五句以内

川柳 一人五句以内

## 九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

## 十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

\* 私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

\* 入選作品集、SNS（高知県芸術祭）等に入選作品を掲載することについて許可をいただくことを条件とします。

\* 生成AI（人工知能）を用いて作った作品の応募はできません。

\* その他、前記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

## 十一、作品への記載事項

①部門名 ②氏名（フリガナ）※ペンネームご使用の場合は併記 ③住所 ④電話番号 ⑤年齢を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはつきり書いてください。

## 十二、部門ごとの注意事項

### 短編小説

■ 作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

■ パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

■ 必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。

・ 一枚目…タイトルを明記

・ 二枚目～十一枚目…作品本文

・ 十二枚目…部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

### 詩

■ 作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・一枚目…一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を記入。

(三行目はあけて) 四行目から本文を書き始めてください。

・三枚目…住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズ  
の用紙へ記入しても可。

■その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。  
■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

\*応募作品は返却しません。

\*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

三、審査員(五十音順)

短編小説…片岡 真 米沢 朝子 若江 克己

詩 …林 嗣夫 増田 耕三 やまとさいみ

短 歌…梶田 順子 田上 悦子 山脇 志津

俳 句…植田 紀子 田村 乙女 橋田 憲明

川 柳…小笠原 望 清水 かおり 山岡 陸宏

四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

(公財) 高知県文化財団内

(TEL) 〇八八―八六六―八〇一三

二〇二四年十二月十五日 発行

編集発行 高知県芸術祭執行委員会

事務局 高知市高須三五三二二

(公財) 高知県文化財団内

印刷所 高知市城山町三六

西 富 騰 写 堂

(非 売 品)



